

強かに打ち付けられた背中や後頭部が痛くて顔を歪めた彼は、自分を見下す男を僅かに睨んだ。そんな事をしても牽制にも威嚇にもなりはしないが、無言の抗議にはなる。

「何だあ？ 喧嘩売ってきたのはそっちだろうが、睨まれる筋合いねえぞ」

「……あの程度で喧嘩を売った事になるなら、お前は随分売られてきたんだろな」

「お前みたいに独占欲が強え奴とか見た事ねえよ。人の金稼ぎ邪魔すんな」

口の端が切れたのか、親指で血を拭いた男は忌々しそうに言い放って彼から離れた。男が言う様に邪魔したのは確かであるし、またその邪魔も言い得て妙だが独占欲からきたものであると自覚しているので反論は出来ない。しかし体を売ろうとしていた所に割って入った事を彼は後悔していなかった。

「ったくよお、客取るのも難儀するっつーのに、まーた探さにやいけねえじゃねえか」

「目の前に居るだろう」

「いい加減飽きるに決まってるだろお？」

「俺は飽きてない」

面倒臭そうに頭を掻きながら響めつ面をする男に自分が客になると言っても、何度か寝た事がある所為かじゃあお前が良いかという反応は得られなかった。このまま立ち去る事を許せばまた客引きをするのだろう。そう思うと腹立たしく、

懐から取り出した巾着を男に投げ付ける様に超越した。

「何だあ、全部くれんのか」

「足りんとは言わせんぞ」

「そうだなー、流石にこれだけ入ってたら足りねえとは言えねえわな。しょうがねえな、今日もお前で我慢するか」

巾着の中身を改めるまでもなく、重さでどれくらい金額が入っているかを推測した男は、手の上で軽く巾着を放りながら本当に心の底から妥協するかの様な声でそう言った。

彼はその金額で何度娼婦が買えるのかという事も知らないし、普段目の前の男を買う時も請求されただけの額を渡している。通常の相場というものを知らない。だが流石に普段渡している平均額の倍ほどの金額が入った巾着を超越せば拒否はされないだろうという事は分かった。事実、男は巾着を腰に着けたポーチに挿じ込むと大儀そうに屈んで彼と目線を合わせてきた。

「宿行くのも面倒だ、ここでやろうぜ」

「どれだけ面倒臭がりなんだお前は」

「良いじゃねえか、たまにや青森も楽しいもんだぜー」

「誰か来たらどうす……っ」

どうやら男が連れ込み宿にも行かずにこの路地裏で事に及ぼうとしている様で、彼がそれに眉を響めて立ち上がろうとすると黙らせる為なのかいきなり頭を力任せに掴まれ口を塞がれた。その勢いで後頭部が石の壁にぶつかり、痛みが走る。

「ん……ぐ、うう……っんぶ、ふう……っ」

この男相手に何度も性交したとは言え、口付けを許して貰えた回数は少ないので慣れておらず、乱暴だが的確に攻めてくる舌が彼の呼吸を奪って酸欠にしていくな。しかし音を立てて髪が抜ける程に頭を掴まれており、痛みで意識ははっきりとしていた。口付けの際に目を閉じるという事をお互い知らないかのようにいつも睨み合っているのだが、この時も彼は男を睨んでいたし男は彼を冷ややかに見ていた。

「は……、随分、熱烈な、誘い方だな」

「嬉しいだろー？ 貰った分はサービスする男だぜ、俺は」

「……だったら、今日は期待して良いという事か？」

「お前のスケベな期待を裏切った事あるかあ？」

「いや……、無い。流石グレゴと言ったら通じる程の手練の傭兵だけはあるな」

「まあな」

グレゴと呼ばれた男は彼の——ロンクールの皮肉を全く意に介さずさらりと流した。それどころか、ロンクールの頭を掴んだ手はそのままに、膝で彼の股間を容赦なく刺激してきた。下着やズボンが汚れたところで知った事かと言わんばかりの行為に対し、ロンクールは文句を言わなかった。緩急をつけて刺激してくる膝から齎される快感を前に言えなかった、という方が正解だろう。

静かで薄暗い路地裏とは言え表は人通りが多く、こんな場

所に用事など無ければ余程の事が無い限り誰も来ないとは思うのだが、矢張り屋外は気が気でない。野営から離れた雑木林などであればまだその不安も解消されるけれども、そこそこ大きな街の路地裏であれば人が来る可能性はぐっと高くなる。そんなロンクールの心配をよそに、グレゴは彼の胸倉を掴むと力任せに立たせた。

「お前のこの服、ほーんと長ったらしいよな。邪魔だから持ってるよ」

今日は金を多めに貰ったからなのか、普段はあまりやろうとしない口淫を珍しくも施してくれるらしいグレゴは、ロンクールの上着を留める腰の帯を無遠慮に取り払うと長い上着の裾を持ち上げて彼に持つ様に指示をした。脱げと言わない辺り途中で誰かが来てもどうとでも対処出来る様にと思っているのだろう。言われた通り裾を持ち、そう言えば着衣のまま行為に及んだ事は無かったな、とどこか冷静に考えてしまったロンクールは、しかしズボンの紐が解かれる音に微かに耳を赤くした。生々しい音はいつまで経っても慣れない。

下着から出されたペニスが外気に触れ、肌寒さを感じてぶるっと背筋が震える。だがその震えはすぐに快感のそれへと変わった。

「は……ああ、……ふ……っ」

膝で刺激されていた所為で大きくなり、窮屈に下着に収まっていたペニスは開放された代わりにグレゴの舌によって弄

ばれ始めた。穂先を整えた筆の様に舌先で鉛口を撫でられ、寒気にも似た電流がじわりと腰から背筋へと登ってくる。竿を根本から支えている手の指で中途半端に抜かれ口先で亀頭を煽られると無様に腰が動いたのだが、その瞬間突然尻を叩かれた。

「動くんじゃないよ、じっと立ってろ」

「……お前が半端な事をするからだろう」

「うんと我慢した方がイッた時すげー気持ち良いってお前も知ってんだろー？ なら我慢しろよ、この早漏」

「ぐ……」

ロンクローが文句を言う前にグレゴが上目遣いで亀頭を軽く食んだまま咎めてきて、その姿に頬がかつと熱くなったのだが、早漏と言われてしまうと別の意味でまた顔が赤くなり何も言えず沈黙した。自慰すらあまり経験が無く、性的な快感に慣れていないロンクローはグレゴが言う通り早漏の気があり、手淫を施されている時に我慢出来ずに射精してしまう事が多々あるので本当に何も言い返せなかったのだ。悔しい事に。

「うっ……く、くあ……っあぁ、……は……っ」

ばつの悪そうな顔で口を閉ざしたロンクローを鼻で笑ったグレゴは、手の中にあるペニスに唾液をわざと零して指の腹で亀頭の下のかびれを擦って暫く廻り、見せ付ける様に口の中にペニスを沈めた。ぐじゅ、ぐじゅ、とわざと音を立て出し入れする口からは唾液が垂れ、埃っぽい地面に染みを作って

いく。その姿はひどく淫猥でロンクローの性欲を煽り、ペニスが更に大きくなったのが分かった。

「は、あ、あぁ、……っぐ、あが……っ！」

裏筋を分厚い舌でもっと擦って欲しくて無意識にまた腰が動く、強烈な痛みが胸を襲った。どうやら拳で胸を殴られたらしく一瞬息が止まったのだが、それなりに強く殴られた所為で反射的に頭が反りまた壁で後頭部を強かに打ってしまった、痛みで気が遠のいた。

「動くなっつってんだろ。あとちゃんとして」

「こ……のっ……っ！」

「うぶっ！ つぐ、ぐえ、おあ……っ」

頭を打った所為で少し折れた膝も呆れながら叩かれとうとうロンクローも堪忍袋の緒が切れてしまい、ペニスの先端を啜えながら見下す様な目で自分を見上げていたグレゴの頭を乱暴に鷲掴みにすると抵抗する間も与えず喉の奥までペニスを挿込んだ。グレゴは咄嗟に体を引き剥がそうとロンクローの足を掴んだものの力任せに挿入されて上手く力が入らなかったのか離れる事が出来ない様だったので、そのまま喉奥を何度も突く。柔らかくて熱い粘液が快感で敏感になったペニスをダイレクトに刺激し、腰から広がる甘い痺れが屋外で性行為に至っているという事実をロンクローの頭から消し去ろうとしていた。

「い……っ！ あぁあっ！」

だが突如襲った激痛が一気に頭を冷やし、ロンクーが投げ捨てる様にグレゴの頭を解放した。どれだけ体を鍛えようと、男である以上は絶対耐える事が出来ないそこは、歯が当たただけでも痛みを感じるというのに噛み付かれると座り込んでしまう程の痛みが齎される。あまりの乱暴な仕打ちに腹を立てたのだらうグレゴが、ロンクーのペニスに何の躊躇いも無く歯を立てたのだ。

「うお……っ、ちよっ、んぶっ」

ひどく不機嫌そうに口元を拭って睨んできたグレゴが罵声を吐く前に、ロンクーは股間の激痛を追い遣りながらグレゴの肩を掴んで無理矢理立たせ、仕返しとばかりに噛み付く様に口を塞いだ。グレゴも強い握力で同じ様に肩を掴んできたが、全体重をかけて壁に押し付けながら口を吸い上げると、今度は唇に激痛が走った。また噛まれたらしい。しかしその程度では解放してやらなかった。

「んぐ、んん……うう、うぐ……ぶはっ、はあっ、はっ、あいつ……変わらな、キスが下手な奴、だな」

「手解きを受けてない、から、な……っ」

お互いの口の中に広がる血の味に眉を顰めて口付けを挿しながら手を振り解こうとするグレゴを、力を籠めて押さえ付ける。股間への膝蹴りを防ぐ為に股の間に足を割り入れて絡ませると身を振って逃げようとされたが、ロンクーもそれなりに力があるので逃しはしなかった。

「何だかんだ言って、お前も随分と硬くしているな」

「溜まつてるから体売りに出たんだろうが」

「いつでも相手になるぞ？」

「お前みてえなドヘタクソは願い下げだつう、の……っ」

股間に割り入れた足で暴れる事を制しつつ弄ればグレゴも同じ様な反応を示していたのでロンクーが挑発すると、彼は鼻で笑う様に憎まれ口を叩いた。それが面白くなって手をズボンに突っ込み、下着の上から握ると、グレゴが顔を歪めて言葉を詰まらせる。この男は乱暴に扱われる方が好きであると知っているロンクーは、下着の布地を擦り付ける様に手で強く弄った。

「はあ、あ、おい、脱がしてから……っんぐ、んん……」

いくら乱暴であっても刺激を与えれば男というのは反応するもので、先走りでも下着を汚す事を嫌ったグレゴが言おうとした文句を封じる為にまた口を塞ぐ。無理矢理歯列を挟み開け舌を絡めながら体全体を壁に押し付けると、後頭部が痛かったのか耳を力いっぱい捻り上げられた。

「はふ、ふあ、あ、い……っつてえぞこらっ！」

「痛いだけか？」

「ひい、んっ！」

やられるだけというのも癪だったので上着にも手を突っ込み、耳を掴まれているのと同じくらいの力で乳首を摘み上げると、もう片方の手にペニスが少し大きくなった反応が伝わ

った。隆起して膨らんだ乳首を爪で引っ掻けば大きな体をびくりと跳ねさせグレゴが珍しく嬌声を漏らし、同時に股間を弄る手が僅かに湿る。

「……相変わらずお前はここが弱いな」

「あ、あっ、……分かつ、り、やすくて、楽、だろおつ……？」

「そうだな」

「んあっ、ああ、あー……っ！」

爪で引っ掻く度に震わせた声に背筋が戦慄き、この男を振じ伏せたいという欲が腹の底から湧き上がって、ロンクーは思い切りグレゴの上着を捲り上げて露になった分厚い胸板に吸い付いた。元から敏感だったのか誰かから調教されたのか、それは知らないが、グレゴは乳首を手や口で愛撫する場合によってはペニスを愛撫するより快感の波に溺れて喘ぐ。その声を楽しみたいのは山々なのだが、生憎屋外である為にあまり大声を出されると人が来てしまうかも知れないと思つた途端、ロンクーはグレゴの口を手で塞いでしまった。

「ふぐ、うう、う、……っんん！」

唾液でべっとり濡れた乳首を甘噛みしながら音を立てて吸えば、手の中のペニスが動く。緩急をつけながら揉みしだくともっと強い力でやって欲しいのか、グレゴが珍しくねだる様に腰をくねらせた。しかしペニスを噛まれた恨みがロンクーにはあるので、まだ直接触つてもやらないし中途半端な力でしか愛撫してやるつもりは無かった。

「んあ……、はふ、……んん……」

「……っ！」

だが口を塞いでいた手を舐められ、それに怯んで力が少し抜けたロンクーの手首を掴んだグレゴは、ちろりと指先を舐めてからそのまま口に啜えた。指の節や爪を音を立てて舌を這わせ吸われると否が応でも先程の口での奉仕を思い出して、ロンクーも触っていないのにペニスがもたげたのが分かった。

「……これも、金に応じてのサービスか？」

「どうせ、この指、突っ込まれるし、な……。濡らさねえと、キツイの俺、だし……」

口でペニスに奉仕するかの様に指を舐められ、普段ならばこんな事はしてくれないのに殊勝な事もあるものだと思つたのだが、普段渡す金額よりも遥かに多くの金を寄越したのだから貰つた分はサービスするという言葉は本当であつたらしい。仕事であれば、この男は約束を違える事は無い。

「う、つく……」

「お前のちんこ、ほーんとでけえよな」

「……他人と比較した事など無いから知らん」

「でえからちゃんんと慣らしてくれよなー」

「あつ、は……っ」

不意に股間に伸びたグレゴの手がもたげたペニスを掴んできたので僅かに腰が引ける。が、体液を竿全体に擦り付ける様に抜かれて堪らず喘ぎ声が漏れ、我慢出来ずにグレゴの口

から指を引き抜いて体を引き寄せた。有無を言わさずズボンの中に手を突っ込み尻の割れ目に指を滑らせると上着を脱いでいない肩に軽く歯を立てられたが、声を出さない為だろうと判断して構わず唾液で湿った指を孔に押し当て、グレゴが息を吐いた音を確認してから一気に沈めた。

「あ、ぎっ……つうう、……ふ……っ」

力を抜こうとしても立っている所為で難しいのか、指に纏わり付く肉が圧迫する。爪を切っておいて良かったと妙な安堵をしながら内壁の肉を割り、そこに自分のものを挿れるスペースを作る為にくるりと指を掻き回すと、グレゴが音を立てて壁に後ろ手を付いた。

いつもの事だが、グレゴは決してロンクーにしがみつかない。男に抱き着くのはぞっとしなれど思っているのかそれとも体を密着させるのが嫌なのか、理由を問うたところ得られる回答など不快にしかならないものであるからロンクーは尋ねた事が無い。しかし逆に自分にしがみついてくるグレゴなど想像もつかないし、万に一つも無いだろうがそんな事をされたら動揺のあまり動きが止まる自信はあるので、せめて不安定な体勢でもグレゴが座り込んでしまわない様に体を支えた。

「う、ぐ、……つくあ、ああ……っ」

指を増やせば漏れ出すグレゴの声に苦しさが増していく。背がぶるつと震えたのは日陰で風もやや冷たい所為なのか、

はたまたグレゴのその声の所為なのか、早く指に絡み付く内壁の肉の感触をいきり勃ったもので味わいたいロンクーにとってはどちらでも良いし興味が無い。表通りを歩く大衆も、野営に居るであろう同僚達も、まさかこんな所で自分達がこんな事をしているとは考えもしないだろうと思うと尚の事背筋が震えた。

「っ、……あ、あっ……」

「かっつえなあ、おい」

「お前に、挿れたい、から……な……っ」

「ふーん……なら、ちよーっただけ、体離せ」

「………？ ……う、つく」

密着した下半身を僅かに動かしながらグレゴが器用にズボンをずらして下着を下ろしたかと思うと、勃起したお互いのペニスを片手で握られ先走りの体液を竿全体に塗られたくらた。そして言われた通りにロンクーが体を離すとグレゴが握っているペニスめがけて唾液を垂らしたので余計に滑りが良くなり、扱かれると淫猥な音が響く。亀頭を擦られる度に孔の内部が収縮して指を締め付け、自分だけではなくてグレゴも快感を得ているのだという事を教えてくれている。そう思うとおり、と項が焼けた様な感覚に見舞われ全身に甘い痺れが駆け抜けてき、目眩がする程のその感覚は目の前の男に噛み付きたくなる衝動を齎した。

「おーっど、あつぶねえな」

「……………つ、く、……………うう、……………つ」

「危ねえつつつてんだろ。キスしたいのか嘸み付きたいのかはつきりしろよ」

ロンクーが勢い良く顔を近づけようとする、グレゴが咄嗟に彼の頭を掴んでそれを阻止した。嘸み付こうとしている様な仕草を見せたのだからグレゴが眉を蹙めたのも詮無い事だが、ギリギリと音を立て頭を引っ張られると痛みしか感じられない。しかし痛みへの抗議ではなく嘸み付けなかつた事への抗議で息を切らしながらロンクーが恨めしそうに睨みながら挿入した指をぐるりと掻き回せば、グレゴの口から呻き声と低い笑いが漏れた。

「ああ、いいいねえ、お前のその取つて喰つちまおうつて感じのガラガラした目、嫌いじゃねえなあ」

「は……………つ、はあつ、……………うあ……………つ」

「挿れてえんだろ、このガッチガチのちんこ」

「挿れたい、お前の奥まで、ああ、」

「ふーん……………じゃあ、」

だらしなく漏れた体液が地面に新しい染みを作っていくのをちらと見たグレゴはロンクーに口付けを許さない様に頭を掴んだまま、それでも唇が触れそうな距離まで顔を近づけてお互いの亀頭を指先で捏ねてから歯を食い縛つたロンクーから体を離れた。指を抜けと目線と言われた気がしたのでロンクーがそれに従うと、肩に手をかけ片足を上げてきて、咄嗟

にロンクーはその足を抱えた。

「お前、向い合つての挿入が好きだもんなあ。それなりの金貰つたから、今日はこれで挿れられてやろうじゃねえの」

「……………立つていられるのか？」

「俺が立てなくなるくらい善くしてくれるんだろー？」

「……………つ」

ただでさえ挿入のお預けを食らっていた様なものであるのに、項を指先で撫でられながら耳朶を甘咬みされ挑発され、更に普段は殆ど真正面からの挿入を許して貰えないが今日は良いと許可を得られたのであるなら我慢など出来る筈もなく、グレゴの足を抱えたままベニスの先端を孔に宛てがったロンクーは彼の腰を支えてからそのまま根本まで埋めた。十分な硬度のベニスは内壁の圧に押し出される事も無く、その圧迫感に仰け反つたグレゴの頭が音を立てて壁にぶつかつた事に配慮する余裕も無く腰を動かせば、グレゴの頭が壁に擦れる音が耳に響く。それでもロンクーは動きを止めなかつた。

「はつ、はあつ、ああ、あ、……………つ?!」

しかし強引に何度も挿入を繰り返していると、上体を逸らしていたグレゴがいきなり片足を踏ん張つて体を密着させたどころか首に腕を絡め抱き着いてきたので、思わずロンクーは腰を止めてしまった。先にも述べたがグレゴはしがみついていた事が無かつたものだから、何が起こつたのか一瞬理解出来なかつたのだ。

「よお、腰が止まってんぞ、立てなくなるくらい、善くしてくれんぞろ……っ?」

「っく、お前、本気で叩くな!」

「来い、よ、もっと奥、まで、ああ、ほら、来いよ……っ」

「この……!」

「あ、がっ……! ひぐ、う、うぐうっ……」

動きを止めたロンクーの背中を、グレゴの大きな手が手加減も無く打つ。それに対して文句を言っても背中どころか腰や尻を叩かれ、ロンクーが再度壁にグレゴの体を押し付けてから言われた通り突くと大口を開かれたので、今度こそ口で塞いだ。鳥の羽ばたきが頭上で聞こえたが目まで追おうとも思わず、夢中で貪りながら腰を振ると背中に回されていた腕が片方外され、放つたらかしにしていたペニスをグレゴ本人が抜き始めた。力任せに突き上げていたから痛みも大きかったのだろう、彼のペニスは多少萎えていた。

「ふっ、ううっ?! う、うぶ、ううう、うっ、うんんっ!」  
だから腰を支えていた手を離して乱暴に上着を捲り上げ、膨らんだ乳首を指の腹で摘み上げると、グレゴは目を見開いて体を震わせた。苦しそうな声の中には確かに快感の色が混ざっているし、何よりロンクーのペニスを締め付ける内部の蠢きが激しさを増している。ガクガクと震えるグレゴの膝が彼を立たせる事を困難にしており、手を腰に戻す代わりに口を解放して思い切り乳首に吸い付いて嘔んだ。

「ぶは、あ、か、嘔むな、よせ、あひっ、ひんっ」

「よせ、じゃなくて、もっと、の間違い、だろっ……?」

「あ、だ、そ、そんな、されたら、い、いく、逝っちまうっ」

「ん……っ!」

「ああ、逝く、出る、出るっ、はあっ……!」

よせと言う割にはペニスを抜く手を止めなかったのを見て、舌で舐りながら歯型が付く程に嘔み、勢い良く吸うと、グレゴは全身を震わせて射精した。汗が滲み出た腹に白い精液が飛び、唾液の糸を舌から伸ばしながら顔を離れたロンクーに荒い息を吐いて全身の体重を預ける様にグレゴが凭れ掛かる。体格は彼の方が良いのでロンクーが少しよろけたが、抱き着かれた形になるので何とか耐えた。片足で立ったままの射精は身体的にしんどかっただろうけれども、グレゴは射精の余韻に浸る様に熱い吐息を漏らしながらロンクーの肩に顔を埋めて時折背中を小さく跳ねさせた。

「……疲れているところ悪いが、俺はまだぞ」

「あ、うっ!」

「外だから、か? それとも、溜まっていたから、か? 随分、早かった、な」

「は……っ、自分が、上達したって、自惚れねえ辺りは、成長したなっ……!」

「俺のなげなしの自信を、毎回毎回すたすたにしてくれるのは、どこのどいつだっ!」



「ひぎつ……!! つあああ! あ、あがつ……!!」

唾液で濡らした指でしか慣らしていないそこはすっきりと滑りが悪くなつており、挿入するにも無理矢理突き上げなければならず、グレゴの濁った悲鳴が痛みを感じていると教えてくれているけれども、ロンクーは止める気など一切無かつた。これでは立てなくなるほど善くしてやる、ではなく、立てなくなるほど痛くしてやる、の方が正しいと彼も分かっていたのだが、いつも馬鹿にして下手くそと罵るこの男を憎らしく思う気持ちの方が強くて、止める事が出来なかつた。

ロンクーの激しい突き上げを不安定な足元で何とか耐えようとしているグレゴがロンクーの背中に爪を立てる。上着を脱いでいない状態であるから傷付きはしないが、カリ、カリ、と布を引く掻く感触が背中に齎され、澄ました耳に布が擦れる音が響く。屋内ではないからと常に音を気にしていたけれども人が滅多に来る事が無い路地裏なのだろう、今のところ靴音が全く聞こえてこなくて、それを見越してここでやろうぜとグレゴは言ったのだろう。

「い、つて……、あぐ、……つう……」

同じ足を上げたままだと擧るのではないかと思ひ、抱える足を交代させた時、グレゴの声が僅かに湿っていた。あまりの痛さで涙が出たのかも知れないのだが、ロンクーがそれを確かめようにもグレゴは肩に埋めた顔を上げようとしないうで確かめる術が無い。しかし小さく涙を啜る音が聞こえたの

で、恐らくそうなのだろう。悪いとは思ってもそれ以上にペニスを締め付ける内部の熱さが堪らず、抜くという選択肢は一切考えなかつた。

「中に、出したら、もう二度と買われてやらねえ……から、な……っ」

「だったら、次からは外でやる、のは、遠慮してくれるか……?」

「は……っ、相変わらず度胸のねえ奴、だな」

「集中出来んだろうが、ただでさえお前に下手だ何だと言われている、のに、外だと尚の事だろう……」

暫く無言で挿入を繰り返して、グレゴが意識してくれているのか絶妙に緩急を付けながら締め付けてくれるお陰で限界が近づいてきており、ロンクーの口から漏れる嬌声で察したらしいグレゴが釘を差してきた。本当にこの男は憎らしいと思つても、その憎らしさも魅力の一つだとも思つてしまうからたちが悪いし泥沼に嵌っていると苦い顔になる。肩口で強引に拭いたのか、顔を見せたグレゴの目尻には既に涙は無く、それが何となく残念な様な安堵した様な、妙な気分が胸の中で渦巻いた。

「はあ、ああ、……っ?!」

「ん、んぐ、んんう、ん、んっ」

「ん、つぶ、うぶ、はあつ、ああ、ああ逝くつ……」  
「ああああ……っ」

何を思ったのか、突然グレゴの方から口を塞いできたので驚いてしまったが、口付けの熱に頭の奥がじんぞ痺れて一気に腰の辺りの快感が爆発して、抱き着かれてはいたけれども何とか射精直前でペニスを引き抜く事は出来た。排泄感に力が抜けた様な喘ぎを零したりグレゴを今度は抱えられず、彼は壁伝いにずるずるとへたり込みそうになったものの、寸でのところで壁に後ろ手をついて留まる。

「は……、はあ……ああっ?!」

荒い息を吐きながら地面に零した精液と上下するグレゴの胸を暫く眺めていると、震える体を前のめりにして彼がロンクールの長い上着を捲って一仕事終えたペニスを口に咥えた。射精したばかりのそこはかなり敏感になっており、擦ったいやら気持ち良いやらで腰が引けたのだが、矢張りグレゴはそんなロンクールの尻を思い切り平手で叩いた。

「待、て、よせ、よせ、ああ、」

「ん……………」

逃げる事を許されず歯を食い縛ってその快感に耐えると、グレゴが口を窄ませ残った精液を吸い上げる様に音を立ててから漸く離れる。そしてその大きな掌の上に、今吸い上げたものを吐き出した。

「イラマチオと、指フェラと、立ちかなえと、キスト、掃除フェラ。あとそこそこ喘いだし、多めに貰った金の分はきっちり働いたからなー?」

「……分かった」

その手を見せ付ける様に掲げられ説明されては頷く他無く、ロンクールは苦い顔をしながら了承する。グレゴはいつでも金の分しか働かないが、今回は多めに寄越したという事もあり、サービスタと言いたいのだろう。

忌々しそうに手を振って吐き出した精液を手から払ったグレゴは埃まみれになったズボンをずり上げ、上着をきちんと元に戻してから響めつ面をして首の関節を鳴らした。その姿を見ながら服装を整えたロンクールもお互いこの姿で往來を歩くには服が汚れ過ぎたと同じく肩を響める。

「後で俺が金を払うから湯屋にでも行かないか」

叩かれた尻を擦りながら、先に路地裏から出ようとしたグレゴの背に声を掛けると、彼は顔だけロンクールに向けてから逡巡した後には肩を竦め、にやつと笑った。

「情事の痕が残る体で行ける湯屋なんぞ、連れ込み宿のやつしかねえぞ。それで良けりゃ行つてやるよ」

「……それで良い、後で払う」

「毎度あり」

暗に二度目の情事を持ちかけたグレゴに、ロンクールはこれ以上無く渋い顔で承諾した。全く以て敵わんな、と心の底から思っていた。